HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	フリードリヒ・シラー『ドン・カルロス　スペインの皇太子　演劇的詩』　一八〇五年最終版　第二幕
著者	北原，寛子；KITAHARA，Hiroko
引用	北海学園大学学園論集(176)：(1)-(46)
発行日	2018-07-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

フリードリヒ・シラー
『ドン・カルロス　スペインの皇太子　演劇的詩』
一八〇五年最終版　第二幕

北原寛子訳

マドリードの王の宮殿

第一場

フィリップ王は玉座についている。アルバ公爵は、冠を被った王の前に、少し離れて立っている。

カルロス　優先権は王国にあります。喜んで
カルロスは大臣の後塵を拝しましょう。大臣は
スペインのためにお話ししています――私はこの家の息子です。
［彼はお辞儀をして下がる。］

フィリップ　公爵はここにいるがよい、皇太子は話してよい。

カルロス　［アルバに向き直りながら］
そういうわけで、公爵よ、王様を私にお譲りくださりますよう
あなたのお許しをお願いしなければなりません。
子どもというものは――あなたもご存知のように――いろいろな
ことを
父親の心に頼ることができます。
これは第三者にとって具合がいいとはいきません。王様は
あなたに遠慮はしないはずです――私は
父上を少しの間だけおかしいただきたい。

フィリップ　ここにいるのはお前の友なのだ。

カルロス　私は、
公爵を自分の友達と思うに値したのでしょうか。

フィリップ　これまでそんなことができたかもしれないだと？――
余は

父親たちよりも、ましな選択をする息子たちは
気に入らない。

カルロス　アルバ公爵の騎士の誇りは
この口喧嘩を聞くことができるでしょうか。
私は生きている限り、厚かましい男を、
息子と父親の間に立って、
割って入る資格もないのに、顔を赤らめもせず、
また何も感じない図太い気持ちで
傍に立っていて呪われるなんて、私は
あぁ――それが王冠に値するとしても、――演じたくはないものです。

フィリップ　［席を立って、怒りのまなざしを皇子に向けつつ］
公爵、席を外してくれ！
［公爵は、カルロスが入ってきた真ん中の扉から出ていく。王は、彼に続いてほかの人にも合図する。］
いいや、次の間に入ってくれ、
余が呼ぶまでな。

第二場

フィリップ王。ドン・カルロス。

カルロス　［公爵が部屋を出るや否や、王に歩み寄り、その足元にうずくまる、非常に興奮した様子で］
ようやく私の父上に戻られました、
今また私の父上です、本当にありがとうございます、
このお恵みを賜りまして。――お手を、父上。――
あぁ、甘美なる日よ！――この口付けの喜びを
あなたの子どもは、長く味わっていませんでした。
どうしてあなたの心から、私をこんなにも長い間
突き放したのですか、父上？　私は何をしましたか？

フィリップ　皇子よ、お前の心は技について何も知らないのだな。
この技から離れていなさい、余は好きではない。

カルロス　［立ち上がって］
そういうことだったのですね！
あなたの廷臣たちのせいですね――父上！
これはよくありません、なんということだ！　全部よくありません、
僧侶の言うことは、全部だめです、まったくだめです、
僧侶という種族の言うことなんて。
私は悪くありません、父上――熱い血は
私の欠点でありますが、私の犯した罪は、若さなのです。
私は悪くありません、悪くなんて本当にありません――たとえ
私の心が、しばしば荒々しく興奮することを嘆いても
私の心は善良なのです――

フィリップ　お前の心は純粋だ、わかっている、

お前の祈りのように。

カルロス　今しかありません！――私たちだけです。
礼儀作法という不安な隔たりの壁は、
父と子の間では崩れ去ります。
今しかありません。希望という太陽の光が
私の中で輝き出します、そして甘い予感が
私の心を突き抜けて飛んでいきます――天空のすべてが
大勢の陽気な天使とともにひれ伏します、
感激に満ちて、三位一体の神が
堂々とした美しい登場を眺めています！――父上！
お願いです！

［彼は父の足元にうずくまる］

フィリップ　放してくれ、立ち上がりなさい！

カルロス　お願いです！

フィリップ　［息子から離れようとして］
この道化芝居は、余に対して不遜すぎるぞ――

カルロス　不遜すぎるとは
あなたの子どもの愛情がですか？

フィリップ　すっかり泣いているのか？
品位を落とす外見だな！――余の目の届かないところに行きなさい。

カルロス　今しかありません――お願いです、父上！

フィリップ　行きなさい！
余から見えないところへ！　屈辱にまみれていきなさい、
余の諍いから離れなさい――我が腕は
お前を受け入れるために開かれているのだから――だから
私はお前を非難するのだ！――臆病な罪しか
そのような源泉から、恥ずべきも育つものはない。
後悔することを恥じない者は、
後悔し続けるのだ。

カルロス　これは誰なんだ？
どんな誤解によって、この怪物は
人間に紛れ込んだんだ？――
人間らしさを永遠に証明しているなんて、お涙ものだな、
この人の目は乾いているし、この人は女から生まれていない――
あぁ、何とかして、その全然使っていない目に
時にふさわしく泣くことを覚えさせることです、そうしないと、
そうしないと、つらい時に
取り返せなくなりますよ。

フィリップ　お前は、父親がとても疑っていることを
美辞麗句で揺さぶれるとでも思っているのか？

カルロス　疑っているだって？
疑念だなんて、そんなのは消し去ってしまいたいな。――僕は
父親の心臓にぶら下がって、そして引き裂いてしまいたい、
父親の心臓のところで、しっかりと裂いてしまいたい、
この疑いというとびきりかたい皮が
この心臓からぽろりと落ちるまでね。――誰なんです、
私を王の愛顧から引き離しているのは？

あの僧侶は、父に対して息子のために何を頼んだのです？
アルバはこの人に、子どもを失って
棒に振った人生のために、何で弁償しようとしているのでしょう？
あの人たちは愛を求めているのでしょうか？――この胸の中に
泉が湧いています、より新鮮で、より情熱的に、
あの濁った、沼のようなため池よりもね、
それらはフィリップの黄金で、やっと開くようなやつですよ。

フィリップ　考え違いをしているぞ、
やめなさい！――お前が侮辱しようとした男たちは、
私が選んだ、信頼のおける家臣たちだ、
お前は彼らを敬うようになるだろう。

カルロス　絶対にないです。
そんな気がします。あなたのアルバのような者たちがすることは、
カールにもできます、カールはもっとできます。あの間借り人たちは、
王国についてなんと尋ねていますか、決して
自分たちのものにならないその国のことを？
――何を彼らは心配するでしょうか、
もしフィリップの灰色の髪に、色が戻ったとしたら？
あなたのカルロスは、あなたを愛したことでしょう。――ぞっとしますね、
一人きりで孤独に、
玉座にいることを考えたら。――

フィリップ　［この言葉にぎくりとなり、考え込んで立ち止まり物思いにふけった後に］　余は孤独なのだ。

カルロス　［いきいきと、温かく、彼のほうに歩み寄りながら］
あなたはそうでした。もう私を憎まないでください、
私はあなたを、子どもらしく、燃えるように愛したいのです。
ただ、私をもう憎まないでください。――なんとうっとりとするような、
甘美なことではありませんか、立派な心の中で
私たちがたたえられていると感じることは、
私たちの喜びが、他の人たちの頬を紅潮させており、
私たちの不安が、他の人たちの胸を震わせ、
私たちの苦しみがほかの人たちの目を濡らしていると
知ったとしたら！――
高貴で皆に愛されている息子と手に手を取って、
バラに囲まれた若さの道をひた戻り、
人生の夢を、もう一度最初から抱くことは、
なんと美しく立派なのでしょう！
ご自分の息子の誠実さの下に、
永遠に、不滅に、生き続けることは、なんと偉大で甘美でしょう、
数世紀にわたる慈悲深さです！
愛しい息子がかつて収穫したものを、植えたり、
繁殖させたものを集めたり、
その感謝がいつの日か、どんなにか高く燃え立つようになること

を予感することは、
どんなにか素晴らしいことでしょう！――お父様、
この地上の楽園について沈黙しているとは、
あなたの僧侶たちは、とても思慮深いです。
フィリップ　［感激しない訳にはいかず］　あぁ、息子よ、
なぁ！　お前は自分で、墓穴を掘ってしまった。非常に素晴らしく
お前は幸せを描き出したな、その幸せを――お前は決して悟らせはしなかった。
カルロス　万能の神よ、かく整え給え！――あなたご自身が、
私を締め出していたのです、父の心から締め出したように、
あなたの王笏に与ることから。今まで、
今日という日まで――あぁ、これでよかったのだろうか、これは正当だったのか？――
今まで、スペインの皇太子たる私は、
スペインでよそ者でいなければなりませんでした。囚われの身でした、
いつか自分が支配者となる、この土地で。
これは正当だったのでしょうか、都合がよかったのでしょうか？
――
あぁ、なんと頻繁に、父上、私は真っ赤になってうつむいたでしょうか、
よその国の大使や
新聞が、最新の
アランフェスの宮廷事情を教えてくれた時には！
フィリップ　お前の血管の中には、あまりにも激しく血が流れている。
あたかも、お前はただ壊れてしまうばかりであるかのようだ。
カルロス　どうか私を
壊してしまってください、父上！――私の血管の中では
血が荒れ狂っています――二十三年間というもの、
不滅なるもののためには何もできずにきました！
私は目覚めました、自分を感じています。――私が
王位に向かって呼び掛ける声は、債権者のように
まどろんでいる私に、目覚めを促してノックします、
そして、若いうちに失ってしまった
時間がすべて、警告するのです、
名誉不足という負債のように、私にやかましく。ほらもうそこに、
偉大なる瞬間が訪れています、やっと私に
たっぷりの利子を要求しているのです。
世界の歴史が、先祖たちの名声が、
太古のように鳴り響く噂の声が、私を呼んでいます。
私に、名誉という栄光溢れる
遮断棒が上がるときが来たのです。――王様、
お願いさせていただいてよろしいでしょうか、
そのために参上したのですが。
フィリップ　まだ願いがあるのか？
言ってみるがよい。

カルロス　ブラバントの反乱は
驚異的に拡大しています。反賊たちの頑固さのため、
強く賢明な対抗防御が必要です。熱狂者たちの
怒りを飼いならすために、公爵が
軍隊をフランドルへ進軍させることになっています、王様から
全権委任を受けています。
この使命は、なんと名誉にあふれていることでしょうか、
あなたの息子を、名誉の神殿に
導きいれるのにぴったりではありませんか！――王様、私に
私に軍隊を、委ねてください。オランダ人たちは
私を大変慕っています、私は喜んで
彼らの誠実さのために、自分の血で保証しましょう。
フィリップ　お前は夢を見ている者のように話している。この使命は
男のものであって、若造にはふさわしくない。――
カルロス　求められているのは
一人の人間です、父上、そしてそれは、
アルバが決してなれなかった、唯一の使命なのです。
フィリップ　恐怖だけが、反逆を服従させるのだ。
慈悲は狂気と呼ぶがいい。――お前の心は
柔らかい、息子よ。公爵は恐れられている――
お前の願いは諦めなさい。
カルロス　私を軍隊とともにフランドルへ
派遣してください。私の柔らかな魂に
あえてお任せください。すでに私の旗の前に掲げられている
王の息子の名前は、
アルバ公爵の死刑執行人たちが、破壊するしかなかったものを
征服しています。
跪いてお願いします。これは
私の生涯で初めてのお願いです――父上、
私にフランドルをお任せください――
フィリップ　［皇子を、穴を開けんばかりの視線でじっと見つめながら］
そして同時に
余の最高の将軍をお前の支配欲に？
剣を余の殺人者に？
カルロス　なんということだ！
私がその程度のものでしかないと？　これが
長々とお願いした貴重な時間の結果なのでしょうか？
［しばらく考え込んでから、いくらか穏やかになって真面目に］
もっと優しく答えてください。私を
そんなにはねつけないでください。こんな意地の悪い答えを受け取って
私はお暇（いとま）したくありません。こんな重い気持ちのままで
退出したくないです。
私をもっと、慈悲深く扱ってください。それが
私には今すぐ必要なのです。これが私の最後の
絶望的な試みです――私には理解できないし、

一人の男として我慢することもできない、あなたが
私に、すべて、何が何でも全部を、そんな風に拒絶することを。
――
さぁ、お暇させてください。願いかなわず、
幾千もの甘い予感は背かれ、
あなたの前から姿を消しましょう。――あなたのアルバと
ドミンゴが、勝ち誇って悠然とすることでしょう、
あなたの子どもが、塵にまみれて泣いている横でね。
宮廷にいるこの大勢の人間たちが、おののく重臣たちが、
僧侶たちの、罪で蒼ざめた徒党が、
あなたが私に厳かに耳を傾けてくれたことの証人だったのです。
私のことを恥ずかしく思わないでくださいね！　父上、
死ぬほど私を傷つけないでください、
廷臣たちの生意気なあざけりのために、
私を非難して犠牲にし、
他人があなたの愛顧を欲しいままにして、
あなたのカルロスは何も乞い求めることができないことで。
私に名誉を与えようとすることを示すために、
私を軍隊とともにフランドルへ送ってください。

フィリップ　この言葉を
繰り返すでない。王の怒りを買うぞ。

カルロス　あえて王様を怒らせましょう、お願いです、
これが最後です――私にフランドルをお任せください。
私はスペインから出ていくべきですし、そうしなくてはならないのです。
ここにいることは、死刑執行人の手の中で息をしていることになります。
重々しく、マドリードの空は私にのしかかっているのです、
まるで殺人を思わせるかのように。
素早く別の地に移ることだけが、私を癒してくれます。
あなたに私を助ける気があるなら――
私を、ためらわずにフランドルへ送ってください。

フィリップ　［威圧的な冷淡さで］
お前のような
そんな病人には、息子よ、よい治療が必要だ。
医者の目の届くところで暮らすことだ。お前は
スペインにとどまるのだ。公爵がフランドルへ行く。

カルロス　［取り乱して］
さぁ、僕を取り囲んでくれ、よき精霊たち――

フィリップ　［一歩下がって］止まれ！
その表情は、何を言わんとするのか？

カルロス　［震える声で］父上、
決定は撤回されないのですか？

フィリップ　これは王がなしたことだ。

カルロス　私の仕事は終わりました。
［怒った動きで退場］

第三場

フィリップはしばらくの間、陰鬱に物思いにふけったまま立っている――その後広間を数歩、行ったり来たりする。
アルバが、さえぎるように近寄る。

フィリップ　ブリュッセルに向かう命令が、いつ出てもいいように、
準備しておくように。
アルバ　すべて準備を
整えております、陛下。
フィリップ　お前への委任状は、
すでに封印を付けて、次の間にしまっている。今のうちに
王妃に暇乞いをし、
皇太子にも別れの挨拶をしておきなさい。
アルバ　怒ったようなご様子で、
皇子様が、先ほどこの広間を出て行かれるところを見ました。
そして陛下も、
呆然としておられ、深く動揺したご様子とお見受けいたします
――
ひょっとして、お話の内容ですか？――
フィリップ　［若干、行ったり来たりした後、］
内容は、
アルバ公爵だった。
［王は、視線を彼に定めたまま、暗い声で、］
――カルロスが
余の忠告を嫌っているのは構わん、しかし、分かって
腹が立ったのは、奴がそれを軽蔑しているということだ。
アルバ　［蒼ざめて、飛び上がろうとする］
フィリップ　今は答えることはない。皇太子を
大目に見てやるように。
アルバ　陛下！
フィリップ　教えてくれ、
私に最初に、皇子の良くない評判を警告したのは
誰だったかな。
その時、余はお前たちを聞き入れ、息子のことは聞かなかった。
余は、あえてそのように試したのだ。将来にわたって、
カルロスは余の王位により近づいているのだ。行け。
［王は次の間に行こうとする。公爵は、別の扉から立ち去る。］

第四場

王妃の部屋の前の広間。

ドン・カルロスが小姓と話をしながら、中央の扉から入ってくる。

控えの間にいた宮廷の人々は、彼が入ってきたときに、隣室へ散っていく。

カルロス　僕に手紙だって？――この鍵は、一体何のためだ？――
この二つを、僕にこんなにこっそり渡すのか？――
もっとこちらへ――お前はこれをどこで受け取ったのだ？

小姓　［もったいぶって］　あのご婦人が
どのようにして私にお示しになったのかは、
お話しするより、当てていただきたいのです――

カルロス　［のけぞって］　あのご婦人だって？

［そう言いながら、彼は小姓をまじまじと見つめる。］
何だって？――どういうことだ？――お前はいったい誰なんだ。

小姓　王妃陛下の
小姓でございます――

カルロス　［驚いて彼のほうに歩み寄り、手を彼の口に押し当てて］
お前は死の小姓だ。ストップ！　充分わかった。

［彼は急いで封印を破り取り、広間の一番端まで行って手紙を読む。そうこうするうちに、アルバ公爵が来て、皇子に気が付かないまま、傍らを通り過ぎて王妃の部屋に入っていく。カルロスは激しく震え始め、次々と、蒼ざめたり、赤くなったりし始める。読み終わると、長い間、何も言わずに立ち尽くし、手紙を見つめたままでいる――とうとう、彼は小姓に向き直る。］

その方ご自身が、お前に手紙を渡したのだな。

小姓　ご自身でです。

カルロス　その方ご自身が、お前に手紙を渡したと？――あぁ、からかわないでくれ。
まだぼくは、あの方の手になるものを読んだことはないが、
お前が誓ってそうだと言えるのなら、お前を信じなければならないな。
もし嘘だったなら、正直に心を開いて打ち明けてくれ、
そしてぼくをからかわないでくれ。

小姓　どなた様をからかうのですか？

カルロス　［再び手紙に目を通し、小姓を疑い深く、探るような表情で見つめる。広間を一回周ってから］
両親はまだ健在なのか？　そうなのか？　お前の父親も
王様にお仕えし、この国の子ということか？

小姓　父は、サン＝カンタン[1]で戦死しました。
サヴォワ公爵の騎士隊長で、
名をアロンソ・エナレス伯爵と申します。

カルロス　［彼の手を取り、目を思わし気に彼に向けながら］
手紙を、王様が、お前に渡したのか？

小姓　［神経質に］殿下、
私は、お疑いになるようなことをしでかしたのでしょうか。

カルロス　泣きそうなのか？

---

[1] フランス北部の町。一五五七年に、ヨーロッパ大陸の覇権を争っていたフランスとスペインが、ここで衝突した。戦いはスペイン側の勝利で終結した。この時フェリペ二世が勝利の記念と死者の弔いのために建設を命じたのが、この作品でしばしば言及されているエスコリアル修道院である。

あぁ、だったら許しておくれ。
［彼は手紙を読む。］「この鍵は、
王妃の東屋（あずまや）の後ろの小部屋を
開けるためのものです。その一番端が、
傍らの小部屋に通じており、そこは、
立ち聞きする者の足跡さえも見えなくなる場所です。
そこでは、愛は自由に、声を上げて打ち明けることができるのです。
それまでは、長い間、ほのめかしにしか頼れなかった愛がです。
臆病な者も、成し遂げることができます、
謙虚に耐えてきた人は、素晴らしい報いを受けます。」
［麻痺から覚めたように］
僕は夢見ているのではない――狂ってもいない――これは
僕の右腕だ――これが僕の剣で――これは
書きつけられたことばだ。真実だし、本当だ。
僕は愛されているんだ――僕なんだ――そうなんだ、僕だ。
僕は愛されている！
［取り乱して部屋を駆け抜け、両腕を天に差し出す。］

小姓　おいでください、殿下、ご案内します。

カルロス　まず落ち着かせてくれ――この幸せに
すっかり驚いて、僕のなかでまだ震えているのではないかな？
自分で、誇りを持って、そう願っていたのではないか？　これまで、
あえて、これを夢見ていたのではないか？　こんなにも素早く、
神でいることに慣れる人間は、どこにいるのだ？
僕はこれまで誰だったのだろう、今は誰なのだろう？　これは
これまでとは
違う空で、違う太陽だ、
もう、涙を流したあの世界ではないのだ――
いいや、これは浮かれた妄想に過ぎなかったのだ――妄想は
終わりだ、僕は目が覚めたぞ。あの人は僕を愛している！
あぁ、お願いだから――僕にマドリードの、
宮廷の、王国のあちらこちらで、話をさせてくれ、
僕がどんなに幸せかっていうことを話させてくれ。
［彼は行こうとする。］

小姓　どちらへ？
どなたにお話になるのですか？　お忘れですよ――

カルロス　［突然ぎくりと驚いて、］
王様を、父上を！
［彼は腕をだらりと下ろし、恥ずかしそうに周りを見回し、落ち着きを取り戻し始める。］
恐ろしいな――
まったくその通りだ、友よ。礼を言うよ、僕は、
すっかり僕じゃなかった――このことを
黙っていなくてはならないことや、至福に対してこんなにもたくさん、
胸の中に閉じ込めておかなくてはならないなんて、それは、
恐ろしいことだ――地中の金は、

死の静けさの下でのみ掘り起こされる、と言うしな。
だから僕も息をしたくないよ。
［小姓の手をとり、脇へ引っ張っていきながら、］
お前が今日
見たことは――聞いているか？――見ていないことだ、
棺のようにお前の胸に沈めてくれ。
さぁ、行って。落ち着きたいんだ。行って。
ほかの人がここで僕らに会ってはいけないから。行けって。

小姓　［行こうとする。］

カルロス　ちょっと待った！　聞けって！――
［小姓は戻ってくる。カルロスは彼の肩に手をのせて、小姓の顔を、
まじめで厳かに見つめる。］
お前は恐ろしい秘密を携えて行く、
それは、注いだ杯を砕いてしまう
あの恐ろしい毒に似ている――
王座のあんまり近くに持っていくのではないよ――
だらだらした奴らの、鷹のように鋭い目にも近寄ってはいけない
よ。
表情をしっかり抑えて。お前の頭は、
お前の胸が守っていることを、決して知ってはいけないよ。
響きを受けはするが、拡散させることはなく、自分でも何も聞い
ていない
死んだ拡声器みたいにしているんだ。
お前は少年だ――いつでも陽気にし、
陽気な者を演じ続けるんだ――
この手紙を書いた賢い女性は、
愛の使者の選び方を、なんと上手に心得ていることか！
ここには、王様も毒蛇を探したりはしないね。

小姓　皇子様、私は、王様ご自身よりも
たっぷりと秘密を知っているということで、
誇りに感じることでしょう――

カルロス　生意気な若造め、
それなのだ、お前が怯えなくてはならないことは――僕らが
公の場で会うことがあっても、お前は照れ臭そうに
へりくだって僕に近づくんだ。決して、
ほのめかそうなどという虚栄心に誘惑されるのではないぞ、
皇子様がお前に寛大であるのと同様にな。お前は、
いい子だから、僕に気に入られるという以上に
重い罪は犯せないんだよ――お前が今後、僕にこっそり
伝えることがあったら、それを絶対に
口外するんじゃない、唇を決して信頼するんじゃないぞ、
普通の思考回路に、
見聞きしたことが混じってはいけないんだ。もっといいのは、
追手に追われた殺人者のように、
誰にも跡を見つけられない道なき砂漠を通って、
僕のところにこっそりやって来るんだ。お前は、
まつ毛や人差し指を使って話すんだ、
僕はお前をじっと見つめながら聞こう。僕らの周りの

空気、光は、フィリップの被造物なんだ。
耳の聞こえない壁が、彼の支払いをもらって立っているんだ――
誰か来る――
［王妃の部屋の扉が起き、アルバ公爵が出てくる。］行け、さようなら。

小姓　皇子様、
右のお部屋ですからね！［退場］

カルロス　公爵だ――いや違う、いやそれでいいんだ。
落ち着いたぞ。

第五場

カルロス、アルバ公爵。

アルバ　［カルロスに近づいて］
二件お伝えさせてください。

カルロス　もうよい――いいから――別の機会に。
［彼は行こうとする。］

アルバ　場所が
悪すぎるようには、たしかに思えません。おそらく陛下は、
お部屋でお話をお聞きになるほうがよろしいですか？

カルロス　何のために？　ここでやってもいいだろう。――ただ手
早く、
そして手短に――

アルバ　私がこちらへ参りましたのは、そもそも
殿下には、例の件を
まことにありがたく、お済ませしてしまうために――

カルロス　僕にありがたいこと？　なんで？――アルバ公爵からの
感謝だって？

アルバ　と申しますのは、殿下が王様のお部屋を
出るか出ないかという時に、私に
ブリュッセルに行くよう、伝えられたからでございます。

カルロス　ブリュッセルか！　そうなんだ！

アルバ　皇子様、
国王陛下がそのお力を行使する以外では、どなたに、
私はこのご恩を感じられましょうか。

カルロス　僕のおかげと？
僕は全然――本当に僕のおかげじゃないよ。
あなたはお出かけになるのですね――神様とともにご旅行ください！

アルバ　ほかには、何もないのですか？
おかしいですね――殿下は
私に、他に何も言わず、フランドルへとお命じになるのですか？

カルロス　ほかの何って？　何がそこに？

アルバ　しかし、つい先ほどまでは、
これら諸州の運命が、

ドン・カルロス様がおいでになることを求めているように見えて
おりましたが。
カルロス　　なんでだ？
でもそうか――その通りだ――前はそうだった――これは
そういうものだろうな、いいぞ、ますます、ずっといい――
アルバ　どういうことでしょうか。
カルロス　［皮肉を込めずに］　　あなたは
立派な将軍だ――それを知らない人はいるだろうか？
妬みたいくらいだよ。僕は――僕は
若者だ。王様もそのように
お考えだった。王様はお正しいのだ、まったくもって。
今はそのことがわかっている。僕は満足だよ。ということで
この件は十分だね。道中ご無事で。僕は、
ご覧のように、ちょうど――僕は
ちょっと要件が重なっていてね――続きは
明日、あるいはお望みなら、
ブリュッセルからまた戻ってきたときに――
アルバ　　何ですって？
カルロス　［しばらく沈黙した後、公爵がまだ留まっているのを見
て、］
何年もかかるんでしたね。――旅は
ミラノ、ロートリンゲン、ブルグントや
ドイツを通るんでしたね――ドイツ？――そうだ
あれはドイツだったな。
かの地では、みんながあなたを知っている！――今は四月で、
五月――六月――七月だ、そうなるな
遅くとも八月の始めには
あなたはブリュッセルだ。あぁ、すぐにあなたの
勝利を耳にすることを、疑ったりはしていませんよ。
あなたは、僕らが寄せる信頼に
応えることのできる人です。
アルバ　［意味深長に］私はむなしさにさいなまれそうだ。
カルロス　［しばらくの沈黙の後、威厳と誇りを込めて、］
あなたは繊細でいらっしゃる、公爵よ――当然です。
打ち明けなくてはなりませんが、私の方から
あなたに武器を振り上げざるをえません、
あなたが私に応える
おつもりでなくてもね。
アルバ　　つもりはないと？
カルロス　［彼に笑顔で、手を差し出しながら、］残念ですよ、
アルバと堂々と闘うためには、
今はちょうど時間がありません。
またの機会に――
アルバ　　皇子様、私たちは、全然違う方法で
見込み違いをしています。例えばあなたは、
ご自分を二十年もたてば、違ったように思えるはずです、
私があなた様を、まさにかつてそう思っていたように。
カルロス　　だから？

アルバ　そうすると、考えてしまうのです、幾夜
美しいポルトガルの
奥方様の、つまりあなたのお母様の傍らで、王様は
このような腕を
ご自分の王位のために、一本犠牲にすることになると
お考えになったでしょうか？
王様は、王位を継承なさることが、
王制を維持するよりも、ずっと簡単だと
きっとご存じだったに違いありません――世間の人々は
王様が世界のことを心配されるよりも
ずっと先に王様のことを心配しなくてはなりません。
カルロス　その通りだな！
でも、アルバ公爵？　でも――
アルバ　そしてどれだけたくさんの血が
あなたの国民の血が流れなければならいのでしょうか、
二滴の精油[2]が、あなたを王にできるとしても。
カルロス　まったくその通りだ、神にかけて――そして二語に、
手柄の功績が、幸運という誇りと対等でありうるだけ
すべて込められている。――でもさて、
行使するか？　アルバ公爵よ？
アルバ　お労(いたわ)しいや、
自分の乳母をののしらずにはおれない、
優しき乳飲み子である殿下！――どんなにか安らかに
その子は、私たちの勝利という柔らかな接吻の上に
身を横たえることもできたでしょうに！　王冠の上に
キラキラしているのは真珠だけです、王冠を手に入れるために
ついてしまった怪我が光っているわけではありません。――この
剣で
よその国民にスペインの法律を記しました、
この剣は、十字架に架けられた方のためにきらめいています、
そして信仰の種のために
世界のこの地域で、血まみれの畝を描き出すのです、
神が天国で裁き、地上では私が裁く、と――
カルロス　神でも、悪魔でも同じこと！　お前は
その手先だった。僕はよく知っているぞ――今は
これについてはもう言うまい。お願いがある。とある
思いから逃れたい――
父上の選択は尊重するよ。父上は
アルバ公爵みたいな人が必要なんだ。あの人がこの人を必要とし
ていることは、
僕がその人を妬んでいる理由にはならない。
あなたは立派な方だ――そうかもしれない、
ほとんどそう思っている。ただ懸念しているのは、
あなたが数千年もしたら、時流にぴったりになってしまうことだ。
僕が想定しておくべきかもしれないのは、アルバのような人が
この世が終わるときに現れる男だったってことだ。

[2] 国王の戴冠式の際に、聖別の印として用いられる二滴の精油を指す。

そしたら、悪徳の巨大な抵抗が
天国の寛容を消費しつくした時には、悪徳の
豊かな恵みが、たっぷり収穫できた時には、
あなたの出番だ。―あぁ神様、
僕の天国！　僕のフランドル人！――でも今は
考えてはだめだ。このことについては黙っていよう。みんなは、
あなたが血の判決を、
予め署名入りで携えて行くと言っていますが？　その意図は
褒めたものですね。そうなると、嫌がらせを
恐れる必要がないのですから。――あぁ、父上、
僕はあなたの考えを、全然ちゃんと理解していなかった。頑なに
僕はあなたに罪を与えた、なぜならあなたが私に
アルバが輝くこの任務を拒んだからだ――
これはあなたへの敬意のきっかけだった。

アルバ　皇子様、
この言葉が値するのは――

カルロス　［怒って、］何だ？

アルバ　それでも、
王の息子であるあなたには手が出せません。

カルロス　［剣に手をかけて］これは血を求めている！――剣を抜け、公爵！

アルバ　［冷たく］　誰に向かってですか？

カルロス　［激しく彼に襲いかかって］　剣を
抜くのだ、突き刺してやる。

アルバ　［抜きながら］　もし、
そうしなければならないなら――
［彼らは闘う。］

第六場

王妃。ドン・カルロス。アルバ公爵。

王妃　［驚いて、自分の部屋から飛び出し、］
剥き身の剣じゃないの！
［皇子に向かって、腹を立て、命じる声で］
カルロス！

カルロス　［王妃を見ると、取り乱して、腕を下げる。動かずに立ち、正気を失っている。そして公爵に急いで駆け寄り、口づけをする。］
すまなかった、公爵！　すべてを許してくれ。
［彼は黙って王妃の足元に身をかがめ、そして慌てて立ち上がり、取り乱して出ていく。］

アルバ　［すっかり驚いてその場に立ち、彼らから目を逸らさないでいる。］
神様、なんと珍しいことでしょうか！――

王妃　［一瞬落ち着きなく疑うように立ち、落ち着く。そしてゆっ

くりと自分の部屋に向かう。扉の所で振り向く。］
アルバ公爵！
［公爵は彼女の後について、部屋に入る。］

エボリ公女の個室

第七場

エボリ公女が理想的な趣で、美しいがさっぱりとした服[3]を着て、リュートを弾いて歌っている。そこへ、王妃の小姓。

公女　［さっと立ち上がり］
来たわ！

小姓　［急いで］　お一人ですか？　おかしいですね、
あの方が、まだここに見えないとは。でもあの方は、
すぐにいらっしゃるはずです。

公女　はずですって？　では
あの方はそうなさるおつもりなのね――それは決まっているのね――

小姓　あの方は、私について来ています。――お姫様、
あなた様は愛されています――愛されていらっしゃいます、あなたほど
愛されている人はいないでしょうし、過去にもそうです。
私が目撃した場面ときたら！

公女　［小姓を、我慢できずに引き寄せて］
さぁ、早く！
お前はあの方とお話ししたのでしょう？　教えてちょうだい、何とおっしゃったの？
どんなふうになさってた？　あの方の言葉は何だったの？
あの方は困った様子に見えた？　びっくりなさったようだった？
あの方は誰が鍵を送ったのか、言い当てられた？
さぁ、早く！――ひょっとして、察していなかった？　あの方はまったく察していなかった？　間違った名前を挙げた？――ねぇ？
一言も答えてくれないの？　あぁ、もう、
恥を知りなさい。そんな風にぎこちなくなることは、なかったのに、
こんなに耐えられないほど、もたもたすることなんて、なかったわ。

小姓　申し上げてもよろしいでしょうか、お姫様？――
私はあの方に、鍵と紙片をお渡ししました。
王妃様の手前の広間でです。あの方は立ちすくみ、

[3] 王妃の侍女たちは、任務の際は黒いドレスを着ているが、この場面でエボリ公女は私服を着用していることがわかる。

ある女性が私を遣わしたと申し上げると、
私をじっと見つめました。
公女　　あの方は立ちすくんだのね？
いいわ！　しっかりやったわ！　さぁ、続けて話して！
小姓　私はもっと申し上げるつもりでした。というのも、あの方が
蒼ざめたからです。
そして私の手から手紙を奪い取ると、
私を脅すようにご覧になって、すべてをご存知とおっしゃいました。
手紙を驚いてお読みになると、
震え始めました。
エボリ公女　　すべてをご存知？
あの方は、すべてをご存知と？　そう言ったの？
小姓　　そして私に、
三回、四回と、あなたご自身が、本当に、
あなたご自身が手紙をお渡しになったのかと尋ねられました。
エボリ公女　　私自身か
どうかと？　それでは私の名前を言ったの？
小姓　お名前は――いいえ、おっしゃっておりません――スパイの
せいだと、おっしゃっておられました。あたりで聞き耳を立てて
いると、そして王様にぺらぺら話すだろうと。
エボリ公女　［よそよそしく］　そうおっしゃったの？
小姓　王様に、とおっしゃいました、すっかり驚かれたと。
とても驚かれていましたが、とりわけ関心を持たれたのは
この手紙は多くのことを知らせているという点でした。
エボリ公女　王様に？　お前はちゃんとそう聞いたのだね？
王様に？
あの方が使われた表現はそうなの？
小姓　　そうです！
あの方は、危険な秘密とお呼びになり、
私に、しっかりと言葉やしぐさに
用心するようにと、警告なさいました。
王様が疑いを抱かないようにするためです。
エボリ公女　［しばらく考え込んで、すっかり驚いて］　すべてが
ぴったりだわ――そうじゃないはずがない――あの方は
お話について承知しているはず――とらえ難いわ！
誰があの方にこっそり告げたのだろう――誰が？
考えてみなきゃ――愛という獲物を狙う鷹の目以外で、
誰がそんなに鋭く、とても鋭く見えるものかしら？
でも続けて、話してちょうだい。あの方は
紙片を読まれたのね――
小姓　　紙片には、幸運が
詰まっているとおっしゃいました。それであの方は震えたので
しょう。
これを信じることを夢に見ていなかったと。
そしてあの方が鍵についておっしゃったことは――
不幸なことに公爵が広間に入っていらして、

仕方なく私たちは――

エボリ公女　［怒って］

でも、一体

公爵がそこで何をする必要があるの？　でもどこに、
あの方はいらっしゃるの？　あの方はどうしてぐずぐずしていらっしゃるの？
なぜお姿を見せないの？――ご覧なさい、お前はどれだけ
間違った報告を受けてきたの？――お前が私に
あの方が幸せになりたいと言わなきゃいけなかったよりも
前からずっと、はるかに幸せになっていたでしょうね！

小姓　思いますに、公爵は――

エボリ公女　　また公爵？

公爵がここで何をしようっていうの？　その図々しい人が
私の静かな穏やかさをどうしようっていうの？
そんな人、あの方が立たせて、送り出すがいいわ。
そうできない人はこの世で誰だというの？――あぁ、本当に！
お前の皇子様は、見たところ、
女の心と同様に、愛そのものをまったくわかってないのね。
あの方は数分の意味をご存じないわ――静かに！　静かに！
人が来る音がするわ。行って。皇子様だわ。
［小姓は慌てて退場する。］
出て行って、出て行って。――私のリュートはどこかしら？
不意を襲うようにしておかなければ。――私の歌で
あの方に仄めかしてあげなくては――

第八場

エボリ公女、そしてすぐにドン・カルロス。

公女　［オットマンに腰掛け、バラードを演奏し続けようとする。］

カルロス　［勢いよく入ってくる。公女を見つけると立ちすくみ、
雷に打たれたように動揺する。］　　なんとまぁ！
ここはどこだ？

公女　［リュートを落とす。彼に向かって、］
あぁ、カルロス皇子様？　そう、本当だわ！

カルロス　［ひどく困り果てて、］
ここはどこです？　狂ったごまかしだ――私は
小部屋を間違えてしまいました。

公女　なんとお上手に、
カール様は、女性が立会人無しでいる部屋を
お見つけになることでしょう。

カルロス　　姫よ――
お許しください、姫――私は――
前の間が開いていると思って。

公女　　そんなことがあるかしら？
自分でちゃんと閉めたと思いますが。

カルロス　そう思われただけです、そうお思いになったのです――
でも断言できます。

勘違いをなさったのだ。閉めようとお思いになって、そう、
きっとそうだと思いますよ――いや、閉まっていたかな？
閉まってはなかった、それはないです。聞こえましたよ、
リュートを――誰かが弾いているのが――あれは
リュートではありませんでしたか？
［と言いながら、疑い深く見回す。］
その通りだ！　あそこにまだある――
リュートが――天の神様はご存じだ！――リュートが
僕は狂いそうなほど好きなんです。僕は
音楽が大好きなんです。自分で自分がわからないな、小部屋へ
飛び込んできたのです、かわいい芸術家さんのところへ、
その人はぼくを天国のように感動させ、力強く
魅了したので、美しい目が拝見したくなったんです。
公女　かわいい好奇心ですが、あなたが
すぐに冷静になったと、お示しすることもできますでしょうに。
［少し沈黙した後、意味ありげに。］
あぁ、私は控えめな男性をいたわらなくてはなりませんね、
その方は、そのような噂の巻き添えにして、
女性が恥をかいたりしないようにして下さるのだから。
カルロス　［心をこめて、］　公女さん、
私は自分で感じています、自分がよくしようとしていることを、
ただ悪くしているだけだと。こんな役回りは、
勘弁してください、演じ切ろうとしても、
まったくもって下手ですから。あなたは
この部屋に世界からの避難所をお求めになっている。
ここであなたは、人間たちに脅かされることなく、
あなたの心の静かな願望のままに暮らすおつもりだった。
不幸の息子である私が現れ、すぐさま
この美しい夢が妨害されてしまいます。――そういうことで
僕は即座にお暇（いとま）しなくては――
［彼は行こうとする。］
公女　［驚き、面喰うが、しかしすぐに気を取り直して、］　皇子様――
あぁそれは意地悪ですこと。
カルロス　公女さん――僕はわかっています、
この小部屋の中のこの光景が、何を
意味するのかということを、そして徳にかなった
戸惑いを尊重いたします。嘆かわしいのは、
女性が赤面すると、大胆になってしまう男です。
もし女性方が僕の前で震えているのならば、僕は気おくれします。
公女　ありえましょうか？――例のない良心ですこと、
若い男性にして王の息子にとって！
そうです皇子様――今はすっかり、あなたは私のために、いて下
さい。
お願いいたします。そんなたっぷりの徳で
すべての乙女の不安を償ってください。だってご存知でしょう、
あなたが突然現れたので、私は
一番お気に入りのアリアのところでびっくりしてしまったと？

［彼女はカルロスをソファーに導き、再びリュートをとる。］
アリアを、カルロス皇子様、私は
もう一回演奏しなくてはいけないようですね。あなたの罰は
私の歌をじっと聞くことです。

カルロス　［まったく強いられることなく、公女の横へ腰を掛ける。］
罰とは、
私の過ちのように願わしいものですね――そして本当に
その内容が私にはとても嬉しいもので、私は――三回目も
お聴きしたいものです。

公女　なんですって？　あなたは全部
おききになったと？　それはひどいです、皇子様――それは
私が思いますに、恋愛の口説き文句では？

カルロス　そして僕が思い違いをしていなければ、幸福な類のもので――
このお美しいお口に、とびきりきれいな歌詞です、
でも確かに、美しいけれど、あまり真実味がありませんね。

公女　ない？　真実味がないですって？――では疑ってらっしゃるの？

カルロス　［真剣に、］
恋愛となると、カルロスとエボリ公女が
お互いに理解しあえるかどうかを
僕はほとんど疑っています。
［公女はぎくりとする。彼はそれに気づき、そして軽やかな親切さで続ける］
というのも
誰が、このバラ色の頬をみて、
情熱がこの胸に荒れ狂っていると信じるでしょうか？
エボリ公女さんが、無駄に叶いもしないでため息をつくという
危険を冒しているのでしょうか？　愛を
体得しているのは、希望なく愛しているものだけです。

公女　［さきほどと同様の朗らかさで、］
あぁ、お静かに！　それは恐ろしく思えます。――たしかに、
この運命を、他ではないあなたは、
すっかり今日――今日追いかけているようですね。
［彼の手を握り、取り入ろうとするように。］
あなたは陽気ではありませんわ、善良な皇子様。――あなたはお
悩みなのです――
なんとまぁ、あなたはずいぶんお悩みで。ありえましょうか？
なぜお悩みなのです、皇子様？　このにぎやかな
使命で世界をご堪能であっても？　無尽蔵の自然の
あらゆる贈り物によっても、
人生の喜びをすべて求めても？
あなたは――偉大な王様のご子息であり、さらに
はるかに、それ以上に、すでに王侯の揺りかごで
才能にめぐまれていました、その才能はむしろ
あなたの地位の太陽のような輝きをも暗くしているのでしょうか？
あなたは――女たちのまったくもって厳しい意見にあるように、

男の価値や名声については差し引いて、矛盾のない判決を下す
買収された裁判官として着席しているのでしょうか？
その人は、その人が気づいたところだけ、とっくに征服したのです、
その人が冷静でいられたところは、燃え立たせてしまいました、
興奮したくなったり、天国と戯れて
神々の幸せをくれてやったりしなねばならないところでは
――その人は
自然が、数千のうちから、幸運なことに
少数の同じ才能の人とともに、飾り立てたのに、
その人自身はみじめでなければならないのでしょうか？
――あぁ天よ、
あなたがすべて、すべてを与えた人に、なぜです、
なぜなのです――その人に自分の勝利を見るための目だけは
お与えにならないのですか？

カルロス　［彼はこの間、すっかり気が散っていて、公女が黙ると急に我に返って飛び上がる。］

素晴らしい！
まったく他に比べるものがない、公女さん。歌ってください、
私のために、ここでもう一度。

公女　［彼をびっくりして眺めて、］

カルロス様、
あなたはこの間どこにいらしたのですか？

カルロス　［飛び上がって］

そうです、なんてことだ！
あなたはちょうどいい時に警告してくれました。――僕は行かなくては、
行かなくてはなりません――急いで行かねば。

公女　［彼を引き留めて］　どちらへ？

カルロス　［不安におののいて］

あちらへ行って、
外に出ます。――行かせてください――公女さん、
僕には、まるで僕の後ろの世界が
炎に包まれ煙を上げているようだ――

公女　［彼を力づくで引き戻す］

どうなさるおつもり？　どこから
このよそよそしい不自然な振る舞いが？
［カルロスは立ったままでおり、考え込んでいる。彼女はその瞬間に、彼を引き寄せ、ソファーのほうへ導く。］
休息が必要です、ねぇカール様――あなたの血は
今沸き立っています――私のところでお座りになって――
暗い熱にうかされた幻想なんて追いやってしまって下さい！
もしあなたご自身が心を開いてお尋ねになるなら、
この頭は、何がこの心に重くのしかかっているかわかるでしょうよ。
そしてもしこの頭が、それを知っていたとしても――それはきっと
この宮廷中の騎士には誰にもできず、
侍女たちすべてのなかにも、できる人はいないでしょう――あなたを癒すなんて、
あなたを理解するなんて、申し上げたかったのは――みんなのう

ち
誰もそうするに値しませんか？
カルロス　［ぞんざいに、考えもしないで］
おそらくエボリ国の
お姫さまが――
公女　［よろこんで、素早く］
本当ですか？
カルロス
私に
請願書を下さい――推薦状を、下さい、
父上に宛てて。下さい！　みんなが言っています、
あなたは重んじられていると。
公女　誰がそんなことを言うのですか？（は！　そういうことね、
この猜疑心のせいで黙っていらしたのね！）
カルロス
たしかに
この話はすでに広まっています。僕は
ブランバントへ行こうと、ぱっと思いついたのです。
だって――だってただ刺激が欲しかったから。
それは、父上は望んでおられなった。――立派な父上は
心配なさったのです、僕が軍隊を指揮するとしたら、と――
私が声を張り上げたところで、そのせいで困ることになるだろう
と。
公女
カルロス様！
あなたは間違って戯れているのだわ。教えてください、あなたは
そんな話をして、私からお逃げになりたいのね。
この点からして、偽善者だわ。目を合わせて。
騎士の行いを夢見るものは――その人は
ねぇ――その人はきっと深く
へりくだって、ご婦人たちに忘れられていた絆を
熱心に盗み出そうとするでしょう。
そして――お許し下さい――
［彼女はそう言って、指でそっと彼のシャツの襟飾りをはじき、そ
こに隠れていたリボンを取ってしまう］　しまっておくには、高
級すぎます。
カルロス　［よそよそしく引き下がり、］
公女さん、――だめです、それはやりすぎです――僕は
裏切られた。あなたを騙す人はいない。――あなたは
精霊や悪魔がいると、信じておられますね。
公女　そのことをあなたは驚いておられるようですね。そのことで
すか？
賭けてもいいですが、皇子様、私は
物語をあなたの心の中に呼び覚ましましょう、――物語です――
やってみて下さい。なんでも聞いてください。
もし、気まぐれ悪ふざけが、つまり音が
空気の中にとぎれとぎれ漂っても、微笑みが
すぐに真面目さによって再び消えてしまっても、
もし、こうした本当にささやかな兆候や
あなたの心が遠くにあったという身振りが
私に見逃されていなかったら、あなたは

あなたが人に見られたくなかったところを、私が心得ていたかどうか、
判断してください。

カルロス　されこれは、実にたくさんのことが企てられたものです。
――賭けは
有効なはずですね、公女さん、あなたは僕に約束しましたよ、
僕自身が決して知らない
僕の心のなかを見つけて下さるって。

公女　［いくらか神経質に、そして真面目に］
決してですか、皇子様？
ご自身でもっとよく考えてみて下さい。周りを見回してみて――
この小部屋は、王妃様のお部屋には入っていません。
王妃様のお部屋では、仮面のちょっとした傷でも
せいぜいのところ称賛されますが、驚きですか？
あなたは突然、真っ赤におなりね？――あぁ確かに
もしカルロス様が盗み聞きされているとはお気づきでなければ
誰が、カルロス様に盗み聞きするほど
頭が冴えていましょうか、そんなにも大胆でしょうか、
そんなにもだらだらしていましょうか？――誰が見たのでしょうね、
その人がこの前の舞踏会で、相手の女性を、
それは王妃様でしたが、立ちっぱなしにさせて、
自分は無理やり、次のペアに体当たりして、
高貴なる踊りの相方の代わりに
エボリ公女に手を差し出したところを？
間違いですよ、皇子様、
ちょうどその時いらした王様でさえ、
お気づきでしたよ！

カルロス　［皮肉な笑いを浮かべて］
あの人さえもですか？　えぇそうです、善良な公女さん、
あの人に限ってということでもなかったのですが。

公女
宮廷礼拝所に
入っていらした時ほどではありません。
その時のことは、カルロス皇子様ご自身でも
思い出せないでしょう。あなたは聖母様の足元で
お祈りして涙を流していました。
突然――あなたに責任があったでしょうか？――とある女性の
服が、あなたの背後で衣擦れの音を立てたのでした。
するとフィリップ様の気心高いご子息は、
教会を前にした異端審問者同様に
震え始め、その蒼ざめた唇には
毒された祈りが死んでしまいました。情熱の
混迷の中で――これは茶番劇でした、
感動的なことに、皇子様――
あなたは手を握ったのでした、
聖母様の冷たい手を、
そして火のような口づけを大理石に降らせたのです。

カルロス　あなたは、私に意地悪をしている、公女よ。それは敬虔

さというもの。

公女　えぇ、そうなると少しばかり違いますね、皇子様、――そうなると
確かに
あの時は、失くすことが心配されただけでしたね、
カルロス様が、王妃様と私と
カードゲームをして座っていて、素晴らしい
巧みさで、私から手袋を奪ったのは――
［カルロスはびっくりして飛び上がる］
それをその方は、その後とても上手に
カードの代わりに再び取り出したのでした。

カルロス　あぁ神よ――神よ――神よ！　僕は何ということをしでかしたのだ？

公女　あなたは、撤回しなくてはならないようなことは、何もないと存じますわ。
私はなんと嬉しく、どっきりしたことでしょう、予期せずして
小さな手紙が指に当たった時は。それはあなたが
この手袋の中に隠すことができたものです。
それはきわめて感動的なロマンツェでした、皇子様、
それは――

カルロス　［彼女の言葉を性急にさえぎって、］
詩です！――それ以上ではありません――私の脳は
時々素晴らしい息吹を立てるんです、
それは素早く出来上がったかと思うと、はじけ飛ぶ。
それだけのことです。このことは黙っておきましょう。

公女　［驚いて彼から離れ、しばらく遠くから、彼をじっと見つめる］
私は疲れ果てたわ――私があらかじめ試しておいたことは
このヘビのようにつるりとした変わり者から滑り落ちてしまう。
［彼女はほんの少し黙り込む。］
でもどういうことかしら？――これは、もっともっと甘美に楽しむために
くだらないことを仮面として必要としているだけの、あの
とてつもない男の誇りっていうものではないかしら？――そうでしょ？
［彼女は再び皇子に近寄り、疑い深く彼を眺める。］
あなたが、それそろ私に教えてください、皇子様――私は
すべての鍵が私を欺く
魔法のように閉められた戸棚の前に立っています。

カルロス　私があなたの前にいるようにね。

公女　［彼女は、彼の傍をさっと離れ、何度か黙ったまま、小部屋を行ったり来たりする。何か重要なことを考え込んでいる様子である。とうとう、数分間をおいてから、真面目に、そして厳かに］
とうとうその時にしなくては。
私は、いつかはお話しすると心に決めなくてはなりません。
審判者にあなたを選びます。あなたは
高貴な方であり――男性で、王族にして騎士です。
あなたの胸に飛び込みましょう。あなたは
私を救うでしょう、皇子様、そして私が救済されずに

負けてしまったら、私に同情して泣いてくださるでしょう。
［皇子は期待に満ち、同情しつつ驚いて近寄る。］
王様に気に入られている生意気なごますり男が
私の手を愛撫するのです――ルイ・ゴメス様、つまりシルヴァ伯爵――
王様が望んでおられ、取引もすでに同意済みです、
私はくだらない者に売られたのです。

カルロス　［激しく動揺して］　売られた？
またもや売られた？
有名な南の商人[4]によって？――

公女　いいえ、まずすべて聞いてください。皆は私を
政治のために犠牲にするだけでは十分ではないのです。
私の純潔が狙われているのです――そこで！　ここで！
この紙片は、この聖者の仮面を剥ぐことができます。
［カルロスは紙を受け取り、彼女の話は時間がかかるので、終わりが待ちきれず、それを読む。］
どこに私は、救いを見出すべきでしょうか。皇子様？　今まで
私の徳を守ってきたのは、私の誇りでした。
しかしとうとう――

カルロス　ついにあなたは落ちたのか？　あなたは落ちたのか？
いや、いや、神にかけて、そんなことはない！

公女　［誇り高く、高貴に］　誰によってですの？

4　「南の悪魔」という異名をとったフェリペ二世を暗示している。

ひどい詭弁ね！　なんと弱々しいのですか、
この強い精神の持ち主たちは！　女性からの寵愛、つまり
愛の幸運を商品同様に敬うことが
求められていることなのですね！　それは
どんな買い手も、自分自身以外に煩わされることのない
世界で唯一のものです。
愛は、愛に対して価値があります。愛は
計り知れないダイヤモンドで、それを私は
タダでくれてやらなくてはならないか、永遠に享受することなく、
埋めてしまわなくてはならないのです――大商人に対してするようにね。
こんな人は、リタルト[5]の金に動じません。
そして非難すべきことに、王様たちには、自分の真珠を
豊かな海に戻しておきながら、自信たっぷりに
彼らの言い値でもって、売りさばいてしまうのです。

カルロス　（素晴らしい神様にかけて！――この人はきれいだ！）

公女　人はそれを気まぐれと呼びます――虚栄心。どちらでもたくさんです。
私は、自分のお友達を分けたりしません。私が選びだした
唯一の男性には、
すべて、すべてのために、この身を捧げます。私は贈ります、

5　ヴェネツィアの大運河にかかる中央橋の名称。ヴェネツィアは商業が盛んなため、転じて、そこで流通する貨幣を指している。

ただ一度だけ、でも永遠に。一人の男性だけを
私の愛は幸福にすることでしょう。――一人を――
でも、この唯一の人を神様にします。うっとりと共鳴する
魂に――口づけを――
愛の逢瀬の官能的な喜びを――
美しさという高く天上的な魔法は
親しみを感じる色合いをした光の一筋であり、
一輪の花の葉っぱに過ぎないのです。私は、
狂った私ときたら！　この花からちぎり取られた葉を
美しいに杯にくれてやらねばならなかったのかしら？
私自身は、女の高い尊厳であり、
神々しさの偉大な作品だというのに、贅沢三昧者たちの晩を
甘くするために、ボロボロに傷つけられてしまうのでしょうか？

カルロス　（信じられない！　どうやって？　こんな乙女がマドリードにはいたのだ、そして僕は――今日やっとそれを知ったのか？）

公女　　ずっと前に、私はこの宮廷を
去るべきでした、この世を去り、
聖なる壁の中に、この身を葬るべきでした。でも
ただ一つの絆がなおも引き戻すのです、その絆は
私をこの世に絶大な力で結びつけます。
あぁ、怪物よ、きっと！　でも私にはとても大切なのです。
私は恋をしていて――そして愛されていないのです。

カルロス　［きわめて熱く彼女に向かって行き］　あなたです！
天に神様がおわしますように明らかです。私はこれを誓いましょう。
あなたなのです、言葉で言い表せない。

公女　　あなたが？　あなたがそれをお誓いになるの？
あぁこれは私の天使の声です！　そうです、
もし確かに、あなたがそうお誓いになるなら、私は信じましょう。
そうおっしゃるなら、その通りです。

カルロス　［彼女を、やさしさを込めて腕に抱きしめ、］
甘く豊かな乙女よ！
崇拝にふさわしい人！――僕は
耳を傾け――目を見開き――恍惚として――まったく
讃嘆して立っているよ。――誰が君を見たというのだ、
誰が、この空の下で、君を見たんだ、
そして自慢するんだ――あの人は人を愛したことがないのか？
と。
しかしこのフィリップ王の宮廷で？　ここで何を？
何を、美しい天使よ、ここでするつもりなんだい？　僧侶や
彼らの規律の下で？　これはそのような花のための
天の軌道ではないよ！――その花はこれを破りたいのかな？
あなたはそう望んでいる――と僕は思いたいな。――でも違うな！
僕が生きて、呼吸しているくらい、違うな！――僕は抱きしめよう、
腕の中に君を、僕の腕の中に

地獄の穴が開いていて、君を運んでいるんだ！
そうさ――僕を君の天使にしておくれ。――

公女　［愛をたっぷり込めたまなざしで、］
あぁカルロス様！
私はあなたのことをほとんど知りませんでした！　なんと豊かに
そして際限なく、あなたの美しい心は、
理解しようと努力するに値します

［彼女は彼の手を取り、口づけしようとする。］

カルロス　［彼女を離して、］
公女さん、
あなたは今どこにいるのですか？

公女　［彼の手をじっと見つめて、繊細さと優美さをこめて、］あなたの
この手は、なんと美しいこと！
なんと豊かなのでしょう――皇子様、この手はまだ
二つの貴重な贈り物を隠し持っています――
王冠とカルロス様の心です――そしてどちらも
きっとただ一人の女性に？――一人？
神様の大きな贈り物ですこと！――ほとんど
ただ一人の女性には大きすぎるでしょう！――いかがです、皇子様？
もしあなたが、分割なさると決心したとすれば、どうでしょう？
王妃たちはひどいひどい愛し方をしますわ――女というものは、
愛することができる女なら、王冠とは折り合いをつけられません、
だからもっとよいのは、皇子様、あなたをお分けになることです、
それも今すぐに、
今すぐ――どうやって？　あるいはもうなさっていたりしていませんか？
本当になさっていたとしたら？　あぁ、それならますます
好都合というものです！
私はこの幸せな女性を存じているでしょうか？

カルロス
知っているはずだよ。
乙女よ、君がいたから、僕は自分を見つけ出した――無垢に対して
純粋で汚すことのできない性質に対して
僕は自分を発見したんだ。この宮廷で君は
僕の心の内をすっかりわかってくれる
最も大切な女性で、唯一の人で、第一の人だ――そうだとも！
僕は否定しないよ――恋しているんだ――

公女
意地悪な人！
あんたにとっては、告白ってそんな程度の重さなのね？
私はお涙ちょうだいのはずよ、もしあんたが
私のことを、愛するに値するとわかったとしたら？

カルロス　［びっくりして、］
え？
何なんだ？

公女　そのようなお戯れを私になさるなんて！
あぁ本当に、皇子様、これはよろしくなかったわ。
それどころか鍵のことで嘘をついたりして！

カルロス
鍵だ！　鍵だ！

［ぼんやりと考え込んでから。］
あぁそうか――そうだった――今気が付いたぞ――あぁ神様！
［彼は膝がよろめき、椅子に縋りつく、そして顔を覆う。］
公女　［二人とも長く沈黙する。公女は大声でわめき、倒れ、］
忌まわしい！　私は何をしでかしたのでしょう？
カルロス　［立ち上がり、激しい苦しみを爆発させて、］
こんなにも深く
僕の天国のすべてのものが崩れ落ちてくる！――
あぁこれは恐ろしい。
公女　［顔をクッションに押し当てて隠しながら、］
私は何を見つけてしまったの？　神様！
カルロス　［彼女の前に身を投げ出して、］
僕は悪くありません、公女さん――情熱なのです――
不幸な誤解です――神にかけて！
僕は悪くありません。
公女　［彼を突き飛ばして］
私の目の前から消えて、
お願いだから――
カルロス　絶対に嫌です！　この
ひどい興奮のまま、あなたの前から去るのですか？
公女　［彼を力づくで脇へ押しつつ、］
広いお心から、憐れみから、
私の目の前から行って。――あなたは私を殺すおつもりですか？
私はあなたの視線を憎みます！

［カルロスは行こうとする。］
私の鍵を返してください。
もう一通の手紙を、どこにお持ちですか？
カルロス　もう一通？
どんな手紙でしたでしょうか？
公女　王様からのものです。
カルロス　［ぎくりとして、］
誰からの？
公女　あなたが先ほど私から受け取ったものです。
カルロス　王様から？　そして誰宛てなんです？　あなた宛て？
公女　あぁ天よ！
なんと忌まわしいことに、私は自分を巻き込んだのでしょう？
あの手紙を
出してください。また持っていないといけないんです。
カルロス　王様からの手紙で、あなた宛てなのですか？
公女　その手紙を！
すべての聖人様の名にかけて！
カルロス　それは
良心が僕に暴露したに違いない――これですか？
公女　私は死んだわ！――返してください。
カルロス　この手紙は――
公女　［疑わし気に、手をもみあわせて、］
私は何か軽率なことをしでかしたでしょうか？
カルロス　この手紙は――王様から来たのですか――そうですね、

公女さん、
これは確かに、すべてを手っ取り早く変えてしまう。――これは
［手紙をひらひらと上に掲げて］
無価値でいて――重く――貴重な手紙です、
これを受け出すには、フィリップ王のすべての王冠が
あまりに軽く、無意味です。――この手紙は
僕が持っておきましょう。
［彼は行く。］
公女　［彼の行く手を遮り］
偉大なる神よ！　私の負けです！

第九場

公女一人。

［彼女はなおもぼうっとしたまま気が遠くなって立っている。皇子が退場した後、彼女は後を急いで追いかけて呼び戻そうとする、］
皇子様、もう一言。皇子様、聞いてください――行ってしまった！
まだあるんです！　あの方は私を軽蔑しているわ――
私が立っているのは
ぞっとする孤独で――突き放され、
非難され――
［彼女はソファーに沈む。しばらくの間。］
いいえ、追い立てられただけよ、追い立てられたのよ
ライバルに。あの方は恋をしている。
もう疑う余地はないわ。あの方が自分で告白したもの。
でも誰がその幸運な女性なのかしら？――たくさんのことが
明らかになった――あの方は愛してはいけないはずのものを愛している。
あの方は暴かれるのを怖れていた。王様の前で、
あの方の情熱は身を潜める――なぜ
王様の前で？　王様はそれをお望みでしょうに？――あるいは
あの方がお父様の内に怖れているのは、お父様ではないの？
あの方に王様の淫らな意図を
暴露した時――あの方の表情は喜んでいた。
小躍りしたわ、幸せ者みたいに――どうしてその時、そうなったのか？
あの方の厳格な徳が、ここでは沈黙するなんて？
ここで？　よりによってここで？――一体その時、
なぜあの方は勝つことができたのか、もし王様が
王妃様に対して――
［彼女はとある思い付きに驚いて突然立ち止まる。――同時に彼女はカルロスから渡されたリボンを胸から引き出し、それを素早く観察し、認識する。］
あぁ私ったら狂ってるわ！
今になってようやく、今――私の感覚はどこにあったのかしら？

今目が開いたわ――あの人たちは
長い間愛し合っていた、王様が彼女を選ぶ前は。
彼女がいないところで、私があの方に会うことは決してなかったわ。
――すると彼女が、
私が限りなく、温かく、とても真実味あふれて
崇拝されていると思っていた時に、彼女が念頭にあったのね？
あぁ例のない詐欺だわ！
そして私の弱さを、私は彼女に対して露呈してしまった――
[沈黙。]
あの方は、まったく希望なく愛さなくてはならないのね！
信じられないわ――希望のない愛は、
このいざこざからは成立しない。前代未聞にも
一番輝かしい王様が
世界を渇望しているところで、愛にふけるなんて――本当に！
そのような犠牲を、希望のない愛はもたらしたりしないわ。
なんと燃え盛るようだったのではないかしら、
あの方の口づけは！　なんとやさしく、私を押し当ててきたのでしょう、
あの方の脈打つ心臓に！――あらかじめ準備したことは
ロマンティックな誠実さというには、あまりにも大胆だったわ、
その誠実さは応えられるべきではないのだけど――あの方は
鍵を受け取っていて、それを、あの方がお話ししたように、
王妃様が送ったと――あの方は
愛のこの巨人のような歩みを信じた――そして来た、
本当にきたのよ、来たんだわ！――そんなにもあの方は、フィリップ様のお妃様が
血迷った決心をしたと信じたのだわ。――ここでの大予行練習が
あの方を元気づけてないとしたら、どうしていたのでしょう？
昼間だわ。あの方の願いが聞き入れられる。女性の方は恋をしている！
あぁ天よ、この神聖な女性が、感じることができたなら！
この神聖さとは、なんと繊細なのだろう！――震えるわ、私自身、
この誠実さの崇高なる恐ろしいイメージに！
より高い性質を、この女性は私の傍らで帯びていて、
彼女の輝きの中で、私は姿がかすんでしまう。彼女の美貌に対して
私はその高い静けさを妬むわ、自由に
人間のあらゆる激しさからかけ離れている。
そしてこの静けさはみかけだったの？　それは
どちらの食卓でも貪り食おうとしたようなものだったのかしら？
誠実さに、すべての栄光をかけなくてはならなかったのかしら？
神々のようにも見える誠実さを誇示しながら、
しかし同時に悪徳の魅力を
こっそりとつまみぐいしてのけたようなものなのかしら？
それが許されたのかしら？　これは復讐を受けずに
軽業師の女が、やってのけたに違いないことなのかしら？　やってのけた、

だって復讐志願者が名乗り出なかったから？――いいえ、神にかけて！
私は彼女を崇拝しています――だから仕返しをしてやらなくては！
王様はこの詐欺を知るべきだわ――王様？
［しばらく考え込んでから。］
そうよ、その通り――これは王様のお耳に入れましょう。
［退場。］

第十場

王宮の一室

アルバ公爵。神父ドミンゴ。

ドミンゴ　私におっしゃりたいことは何ですか？
アルバ　重要なことを
見つけたのです、今日分かったのです。そのことについて
お知らせさせていただきたいのです。
ドミンゴ　何が
分かったのです？　何のお話ですか？
アルバ　カルロス皇子様と
私は、今朝ばったりと
王妃様のお部屋の前の控室でお会いしました。私は
侮辱されました。私たちは、頭に血が上りました。言い争いは
いくらか大声になりました。私たちは、剣を手に取りました。
武器の音に、王妃様は
扉を開かれて、私たちの間に飛び込まれ、そして
力強い支配者が、親密さを込めるような目で
皇子様をにらみました。――それは独特のまなざしでした。――
皇子様の腕はこわばり――彼は私の首にすがりつき
私は、熱い口づけを感じました――彼は
姿を消しました。
ドミンゴ　［しばらく黙ってから、］
これはとても疑わしいですね――公爵、
あなたは私に、何かを注意喚起なさっているのですね。――同じような
考えが、私も正直申しますと、私の胸の中に
すでに芽生えていました。――私はこの幻を避けてきました――
まだ誰にも打ち明けていません、
両刃の剣があります、漠然とした喜びなのです――
私はこれを恐れているのです。判断するのは難しいですが、
徹底的に究明することがもっと難しいのは、人間たちです。
漏れ出たことばは、侮辱する類のものや
親密なもの――それゆえに私は、
秘密を、日の下に現れるまで、埋めてしまったのです。

ある種の活動を、王様たちのために行うことは
嫌なものですよ、公爵――思い切って投げてみても
袋には入らず、打ち手に
跳ね返されるのです。――私が言いたいことは、つまり
私は聖餅[6]に誓いたかったのです――しかし
目撃した証拠や、ちらりと聞こえた言葉、
たった一枚の紙きれが、天秤にかけると重く下がるのです、
私のこの上なくしっかりとした感情よりも。――呪わしい、
私たちがスペインの大地にいるということが！

アルバ　どうして
ここではだめなのですか？

ドミンゴ　他のあらゆる宮廷では
情熱が我を忘れることができます。ここでは
それは不安を掻き立てる法律によって警戒されています。
スペインの王妃様たちは、罪を犯されると
苦労なさるわけです――私はそう思っています――しかし
不幸にも、まさに――ちょうど、私たちにとって
一番うまくいっているところで、不意打ちされるとは。

アルバ　続きをお聞きください――カルロス様は本日
王様と面会されました。謁見は
一時間続きました。あの方は、オランダの統治を
お願いしていました。大きな声で、激しく、お頼みでした。
私はこれを、小部屋で伺いました。あの方の目は
赤く泣き腫らしておられました、扉の所で
お会いした際にはです。それに続く昼に、あの方は
勝ち誇ったようなお顔で、姿を現されました。
私を王様がお引き立てになったことを、喜んでおられたのです。
あの方はそれをお父上に感謝しておられました。事情が変わった
と
あの方はおっしゃいました。しかも良いように。
あの方は決して、偽善的な振る舞いがおできになりません。
どうやって私は、この矛盾のつじつまを合わせるべきでしょうか。
皇子様は、喜んで小躍りしてらっしゃいましたし、
私に王様は恩寵をかけて下さいました、
とてもお怒りもしたのにですよ！――何を私は
信じるべきでしょうか？　本当に、この新しい威厳は、
思し召しというよりも、国家の譴責（けんせき）に近いです。

ドミンゴ　ではそちらにほうに
進捗しているのですね？　そちらへ？　そしてこの一瞬のうちに
私たちが何年もかかって築いたものが
砕け散ったのでしょうか？
そしてあなたはそんなにも穏やかで？　そんなにも冷静で？――
あなたはこの青年をご存知ですか？　予測できますか、
あの方が権力を持たれたら、私たちに何が起こるかを？――皇太
子様――

6　キリスト教のミサで、イエス・キリストの肉体を象徴する小さなパン。ここでは神聖なるものの象徴として言及されている。

私はあの方の敵ではありません。他の憂いが私の安らぎを
蝕んでいるのです。つまりそれは、王位をめぐる心配であり、
神と教会についての心配です。――皇太子殿下は、
（私はあの方を存じています――あの方の心のうちに入り込んでいます）
ぞっとするような腹案を抱いていらっしゃる――トレド様[7]――
支配者であり、私たちの神聖な信仰を失くしてしまうという
狂気の腹案です。――
あの方のお心は、新しい徳に燃え盛りだしている、
それは、誇り高く確実で、自分自身でよしとし、
いかなる信仰にも乞おうとしないのです。
――あの方は考えているのです――
あの方の頭は、奇異な怪物で
燃え上っています――あの方は人間を崇拝しているのです――公爵、
あの方が私たちの王にふさわしいでしょうか？

アルバ　怪物ですよ！
他に何と？　ひょっとしたら、何か役割を演じたがっているのは
若者らしい誇りかもしれません。――あの方に
他の選択肢がありますか？　過ぎたことです、
いつかあの方も、命令を下す番が来ます。

ドミンゴ　私は疑っています。――あの方は自由を誇っていらっしゃいます、
無理強いに不慣れなので、他の人は無理強いを買うことを
しぶしぶ承知しなくてはならないのです――あの方は
私たちの王座で有能でしょうか？　向こう見ずな巨大な精神の持ち主は
私たちの国家術で引いた線を、引き裂いてしまうでしょう。
この向こう見ずな勇気を
今のうちに消耗させようと、私が努力したことは無駄でした。
あの方は試練に打ち克たれた――恐ろしいのは、
この肉体の中に、この指針があることです
――そしてフィリップ様は
六十歳になられる。

アルバ　あなたの視線は、ずいぶん遠くまでお見通しだ。

ドミンゴ　あの方と王妃様は一体です。
すでに、隠れてではありますが、お二人の胸の中に
毒が新たに忍び込んでいます。しかし間もなく
その毒が回れば、王座に掴みかかるでしょう。
私はこのヴァロワ家の女性を存じております。――用心しましょう、
この静かな敵の復讐のすべてを、
もしフィリップ様が衰弱されたときには。なおも
運は私たちに向いています。先手を打つのです。

[7] アルバ公爵は、名をフェルディナンド・アルヴァレス・デ・トレドと言った。

一つの罠の中に、お二人が落ちるのです。――さぁ、
そのようなことを王様に暗示するのです、
証拠があろうとなかろうと、もしあの方が不安定だとしたら。私たちは
お二人を疑ってはいません。確信するために
いかなる確信が重すぎるということはありません。きっと
あるはずなのです、私たちはもっと多くを見つけ出すのです、
私たちは
前もって確信しているのです、見つけ出すはずだということを。

アルバ　しかし一番大事なことをお伺いしたい！
誰が、王様にお知らせする仕事を引き受けるのですか？

ドミンゴ　それはあなたでも、私でもありません。お聞きください、
すでに長い間、この大きな計画を完成させようと
私は静かに目的に向かって、励んでまいりました。
私たちの同盟を完成させるためには、
三人目が、一番重要な人物が足りていません。――王様は
エボリ公女様を愛しておいでです。私は
自分の願望を膨らませる情熱に、滋養を与えています。
私は王様の使者なのです。――私たちの計画のために
あの女性を教育しております。――この若いご令嬢の中で、
私の作品は完成するのです、同盟の参加者であり、
私たちを栄えさせる王妃様となられるはずです。あの方ご本人が
私をこの部屋へ呼び出しました。
私はすべてを望んでいます。――あのヴァロワ家のユリが
スペインの乙女によってへし折られるのです、
おそらく、とある真夜中に。

アルバ　何を私は耳にしたのか？
本当ですか、私が今聞いたことは？――天にかけて！
とても驚きました。そうです！　一筆で完成です！
ドミニコ会士さん！　あんたはすごいよ。
今となっては、我らが勝ち――

ドミンゴ　静かに！　誰か来ます！――
あの方だ――ご本人です。

アルバ　私は隣の部屋にいます、
もし――

ドミンゴ　もうわかりました。お呼びします。
［アルバ公爵、退場する。］

第十一場

公女。ドミンゴ。

ドミンゴ　あなた様の
仰せの通りに、公女殿下。

公女　［公爵を興味深げに見送りながら］
私たちは

二人きりではないのですか？　あなたは、見たところ、
証人をお傍においているのかしら？

ドミンゴ　なんですって？

公女　あれはどなた？
今ちょうど、あなたのところから去っていったのは？

ドミンゴ　アルバ公爵様です、
殿下、あの方は私に
面会なさりたいということでした。

公女　アルバ公爵？　何のご用事かしら？
どういうご用件なんですか？　何かひょっとして
教えていただけますか？

ドミンゴ　私がですか？　存じておりますのは、
エボリ公女様に再びお目にかかれるのは
長く待ちわびた幸せであり、
私にはどんなに大切な出来事かということでございます。

［沈黙、その間彼は公女の答えを待っている］

ついに、王様のお望みについてお話しする
状況が熟したのでしょうか、それとも私は
根拠をもって期待できるのでしょうか、よくよく考えた結果
あなた様がこの申し出を受け入れる気になられたと、
強情や気まぐれなどではなく？
私は期待しております――

公女　王様に
私のこの間のお答えをお知らせしましたか？

ドミンゴ　まだそれを
先延ばしにしております、殿下、あの方を死ぬほど傷つけること
ですから。
まだなのです、殿下、まだ間に合います。それを和らげるのは
あなた様次第でございます。

公女　王様にお知らせしてください、
お待ちしておりますと。

ドミンゴ　なんと、
本当だと思ってよろしいでしょうか、麗しき殿下？

公女　冗談ではないかとですって？　神様！　あなたは私を
不安にさせるのね。――なんですって？　私は何をしでかしたの、
あなたったら――蒼ざめていらっしゃるの？

ドミンゴ　公女様、この驚きを――ほとんど
理解することができないのです――

公女　えぇ、尊敬すべきお方、
これはあなたにはお分かりになるはずはないわ。世界のあらゆる
善きものにかけて、あなたにはわかってもらいたくないです。
それはそうだということで、あなたには十分なのです。あれこれ
と、
ご面倒なことを、くどくどお考えにならないで、
あなたに説き伏せられて、気が変わったのです。
あなたへの慰めに、付け加えさせてください、あなたは
この罪に関りはありません。
教会も関りはありません。あなたは私に教えてくださいました

が、
教会が
若い女性の肉体を、
より高い目的のために使うことができるのだということを。
これも違うのです。――同じくらい敬虔な理由は、
尊敬すべきお方、私には高すぎるのです――

ドミンゴ　非常に喜んで、
公女様、それを差し控えましょう、それらが
水で流せる限りすぐに。

公女　お願いいたします、
私のせいで王様を、ええ、
こんなことをするので私のことを、見損なわないでください。
私は今も、昔のままです。ただそれ以来、
いろいろな状況が変わったのです。
私があの方のお申し出を、怒ってはねつけたとき、
てっきり美しい王妃様が
あの方を幸せにしていらっしゃるものと思いました――思ったのです、
誠実な妻が私の犠牲になるのだと。
その時はそう思っていたのです――その時は。ただし今は
もっとよく状況を理解しています。

ドミンゴ　公女様、さぁ、続きをどうぞ。
聞いております、私たちはよく理解しあえます。

公女　わかりました。
あの女は捕らえられていたのです。私はもうあの人をいたわりません。
狡猾な泥棒女は捕まえられました。王様を、
全スペインを、そして私を、あの女は欺いたのです。
あの人は恋をしているのです。
私は、あの人が恋をしていると知っています。ここに証拠を
持ってきました。あの女を震え上がらせるはずです。
王様は欺かれているのです――でも、神様！
王様は、うすうすにおいに気づいてはいたのです。
高貴で、超人的な諦念のふりをした仮面を
あの女からはぎ取ってやります、全世界が
罪の女の顔を見られるように。それは
私にとてつもない対価を求めるものではありますが、でも――これは
とても素敵です、私が勝つのだから――でもあの女は
もっと大きな勝利を獲ているわ。

ドミンゴ　では、すべてが熟しました。
公爵を呼ぶことをお許しください。
［彼は出て行く］

公女　［驚いて］　どうなるのかしら？

第十二場

エボリ公女。アルバ公爵。ドミンゴ。

ドミンゴ［は公爵を招き入れて、］
アルバ公爵、
私たちのお知らせは、ここに届くには遅すぎました。エボリ公女様は
秘密を私たちに明かしてくださいましたが、それはちょうど
私たちがお知らせするはずのものでした。

アルバ　私がやってきたのは、
そうなると、ますます意外なことではないというのことです。
私は自分の目を信用していません。このような
謎解きは、女性の目線が必要です。

公女
あなたは謎解きとおっしゃいましたね？――
お優しい公女様、

ドミンゴ
私たちは知りたいのでございます、どこで、
どのご都合の良いお時間に、あなたが――

公女　それもなのね！
では、明日のお昼に、あなた方をお待ちしましょう。
私には、この罰すべき秘密を、
これ以上隠すべきでないという理由がいろいろあります。
――これは
もう王様にお隠しすべきではないのです。

アルバ　私がここに来たのは、まさにそのためなのです。
ただちに
王様のお耳に入れるべきです。あなたが、
あなたによって、公女様、王様はお知りにならなくてはなりません。
ご自分の奥様の用心深いお友達のなかでも厳しい方以外に
誰を、王様は信じるべきでしょうか？

ドミンゴ　あなた以外の誰に、そうしようと望む限りにおいてですが、
あの方を際限なく支配することができるでしょうか？
私は

アルバ
きっぱりと、皇子様の敵です。

ドミンゴ　私から当然のように受け取ること、
まさにこのことに、いろんな方々は慣れています。
エボリ公女様はご自由です。私たちが
黙っていなければならない時に、義務があなたに
語れと命じています。あなたの任務の義務なのです。王様が
私たちからお逃げになることはありません。もしあなたがほのめ
かしたことが功を奏したら、
そうすれば私たちの作戦は成功です。

アルバ　しかし間もなく、
すぐにそうならなければなりません。一瞬一瞬が、

貴重です。いつでも次の時間に、
私に出発の命令が下るかもしれません。

ドミンゴ　［しばし熟考し、公女に向き直り、］
手紙を
見つけされられるでしょうか？　これらの手紙は確かに
皇子様から取り上げて、
ここで効果を発揮するべきでしょう。――見てみましょう
――そうではありませんか？――そうなのです。
お眠りくださいまし――私が思いますに――まったく
王妃様と同じお部屋で。

公女　まず
この件です。――しかし、私は何をすればいいのですか。

ドミンゴ　誰が
お城の流儀を心得ているのでしょう！　あなたは
小箱の鍵いつもどこに保管することになっているか
ご存知ですか？

公女　［考え込んで、］　そうすれば
何かにたどり着けるはずでしょうね。――えぇ――鍵は
きっと見つけられるはずです。――

ドミンゴ　手紙は使者を欲するもの――
王妃様の侍従団の規模は大きいです。――ここにいる誰かが
跡をつけられでもしてしまったら！――黄金は
確かに多くのことができますが――

アルバ　皇子様に信頼する者がいるかどうか
誰も気づいていないのですか？

ドミンゴ　おりませんね。
マドリード中に、一人もおりません。

アルバ　それは珍しいですね。

ドミンゴ　この点については、どうぞ私をご信頼いただいて結構です。
あの方は宮廷全体を嫌っています。私は試してみました。

アルバ　でもどうやって？　今ちょうど思い出しました。
私が王妃様のお部屋から出てきた時、
皇子様は、王妃様の小姓の一人の傍にいらっしゃいました。
二人はこそこそ話していて――

公女　［さっと割り込んで、］
そうではないわ！　違うわ！　それは――
別の件ですわ。

ドミンゴ　私たちは
それを知ることができますか？――いいえ、状況は疑わしいです
――
［公爵に。］
あなたはその小姓をご存知でしたか？

公女　子どものいたずらよ！
さもなくばどうなったというのです？　充分よ。
私は知っています。――では、私たちはまた会いましょう。
私が王様にお話しする前に。――その間に
多くのことがわかるでしょう。

ドミンゴ　［公女を側（かたわら）へ導きながら、］
王様は望みを抱いてもいいのですね？
私はこのことを、あの方にお伝えしていいのですね？　確かに？
いつあの方の願望が
ついに満たされるということも？　このことも？

公女
数日したら、私は病気になることにします。私は
王妃様から離されることになります――これが
あなたもご存知のように、私たちの宮廷の習慣ですから。
そうしたら私は、部屋にこもります。

ドミンゴ　幸いなるかな！
この大きなゲームに勝ちました。挑戦状を
すべての王妃様たちにたたきつけるのです――

公女　静かに！
私は呼ばれています――王妃様がお呼びです。
さようなら。
［彼女は急いで退場する。］

第十三場

アルバ。ドミンゴ。

ドミンゴ　［公女を目で追いながら、しばらく沈黙した後に、］
公爵様、このバラ、
そしてあなたの剣――

アルバ　そしてあなたの神――では私は
私たちに落ちてくる雷を待つことにしましょう！
［彼らは退場する。］

第十四場

とあるカルトジア会修道院にて

ドン・カルロス。修道院長。

カルロス　［入ってきた修道院長に向かって、］
ではもうそこに着きましたか？――僕は嘆いています。

修道院長　今朝からすでに三回目ですね。
一時間前にあの方は出て行かれましたよ――

カルロス　彼は戻って
来るつもりですよね？　何か言い残していませんか？

修道院長　正午になる前には、とお約束になっていました。

カルロス　［窓に近寄り、あたりを見渡しながら］
あなたの修道院は

街道からずいぶん離れていますね。――あそこの方に
まだマドリードの塔が見えます。――その通りだ、
そしてここにはマンサナレス川が流れている。――風景は
僕が見たいと思っていた通りです。――すべてが
ここでは静かです。まるで秘密みたいです。

修道院長　別の世界に
入り込んだかのようです。

カルロス　尊敬する院長様、
あなたの実直さを、僕は自分の宝物と、
つまりぼくにとっての聖なるものとして信頼してきました。みんなは
誰と僕が面談したかなんて知ってはならず、ただ推測するだけで、
秘密なんです。僕には
全世界を前にして、僕が待ち焦がれている男性を
知らないというとても大切な理由があります。
そのために僕はこの修道院を選んだのです。裏切りや
不意打ちから僕たちは安全なのでしょうか？
私に何と断言していいのか、考え込んでいますね。

修道院長　殿下、私共をご信頼ください。王様たちの
猜疑心はお墓を探し回ったりはしないでしょう。
好奇心の耳は、幸運や情熱の扉にのみついているものです。
世界はこの壁の中では止まっているのです。

カルロス　あなたは
用心の背後に、この不安が、つまり
良心の呵責が隠れているとでもお考えですか？

修道院長　私は何も考えていません。

カルロス　神父様、お考え違いをなさっていますね。
あなたは確かに、誤った判断をしています。私の秘密は、
人間を怖れているのであって、神様は怖れていません。

修道院長　我が息子よ、
私たちはそんなことはほとんど気にしていません。この隠れ家は
無垢に開かれているように、犯罪にも開かれています。
あなたがなさろうとしていることが、良いのか悪いのか、
まじめか罪深いかは――それは
あなたご自身の心がお決めなさい。

カルロス　［温かさを込めて］
私たちが
隠していることでは、あなたの神様を汚したりはできません。
それは神様ご自身のきわめて素晴らしい活動なのです。――たしかに
あなたには打ち明けていいかもしれません。

修道院長　何のためにですか？
どうかご勘弁ください、皇子様。世界と
その仕組みは、すでに長い間
封印されて遥かな旅を続けています。
何のために、私がお暇するまでの短い期間で、
いったん中断するのですか？――それでは
至福を得るためには少なすぎます。――祈りの

時を告げる鐘が鳴っています。私は祈祷に行かねばなりません。
［修道院長退場。］

第十五場

ドン・カルロス。マルキ・フォン・ポーザが入ってくる。

カルロス　あぁ、とうとうまた、やっと――
マルキ　　忍耐のない友達にとっては
どんな試練だったろうね！　太陽は
二回昇り、二回沈んだよ、
僕のカルロスの運命が決まってからというもの。
そしてとうとう聞くことになるんだね。――言ってごらん。
君たちは仲直りしたんだよね？
カルロス　　誰のこと？
マルキ　　君とフィリップ王じゃないか。
で、フランドルのことも決まったの？
カルロス　　明日
アルバ公爵がそっちに向けて発つこと？――それは
決まったよ、うん。
マルキ　　そんなはずない。そうじゃないよ。
マドリード中が騙されているのか？　君は
こっそり謁見したって、噂で。王様が――
カルロス　決心を変えなかった。僕らは決別だ、永遠に。
これまで以上に離ればなれさ――
マルキ　　君は
フランドルに行かないのか？
カルロス　　いいや！　いいや！　いいや！
マルキ　　あぁ僕の希望が！
カルロス　このほかのことなんだけど。あぁローデリヒ、
僕らが別れてから何を体験したことか！
でも、さぁ、今は、とにかく君の助言を！　この話を
しなくては――
マルキ　　君のお母様か？――いいや！――何のために？
カルロス　僕には望みがあるんだ。――君は蒼ざめたのか？　落ち
着いて。
僕は幸せなはずだし、幸せになれるよ――でもそれについては
また別の機会に。さぁ当ててみて、どうやって僕が
それを話すことができるか――
マルキ　　何だっていうんだ？　何のせいでこうしてまた
浮かれた夢を見ているのか？
カルロス　　夢ではないよ！
素晴らしい神様にかけて、違うよ！――真実、真実がだね！
［王がエボリ公女に宛てた手紙を取り出しながら］
この重要書類に書いてあるんだ！
王妃様は、自由だよ、人間の目からしてもね、

神様から見ても自由なように。これを読んでよ、
もう疑わなくなるよ。
マルキ　［手紙を開きながら］　何だって？
何というものを目にしているんだ？　王様の御自筆か？
［それを読んだ後に］
この手紙は誰宛てなの？
カルロス　エボリ公女さんだよ
――一昨日王妃様のとある小姓がね、
知らない筆跡の手紙と鍵を
僕に持ってきたんだ。そこには
王宮の左側へと来るように、僕に指示があったんだ。
王妃様がお住まいになっているところだね。
小部屋では、僕を長く慕っていたという
ご婦人がお待ちだそうで。僕は
すぐに指示に従って――
マルキ　狂った奴め、従ったのか？
カルロス　誰の筆跡かわからなくて――わかったのは
そんな感じのご婦人らしいということだけだ。あの方以外の誰が
カルロスに崇拝されていると勘違いする？
うっとりとふらふらして、僕はその場所に飛んで行ったさ、
天上の歌声が、その部屋の
内側から響いてきて、
案内役になってくれた――その部屋を開けたら――
誰がいたと思う？――僕の驚きを感じてくれよ！
マルキ　あぁ全部わかったよ。
カルロス　救いなく
僕は負けたね、ローデリヒ、僕が
天使の手に落ちなかったらよかったのにね。
何という不幸な偶然なんだ！　僕が目にしたことを
軽はずみに口にしたことに騙されて、
彼女は甘い思い違いに対して、自分の身を犠牲にしたんだ、
彼女こそ、この目が崇拝する対象となったらいい。
我が魂の静かな苦悩に心を震わせ、
気高く無思慮に、
彼女の柔軟な心は、僕に愛するよう語りかけてきた。
畏敬の念は、僕に沈黙を命じているようだった、
彼女はそれを破る大胆さを備えていた――心を開いて、
彼女の美しい魂は、僕の前に横たわっていた。――
マルキ　そんなに穏やかに
君はこの話をするのか？――エボリ公女は
君をお見通しだぞ。もう疑う余地はない。彼女は
君の心の奥深くにある秘密の愛に押し入ってくるぞ。
君は彼女をひどく侮辱したんだよ。彼女は
王様を支配しているんだ。
カルロス　［自信たっぷりに］
彼女は誠実だよ。
マルキ　彼女は、

愛を私利私欲で使うことには誠実さ。――誠実というものを
僕はとても怖れている。僕はこれを知っている――どれだけ
それが高いところにある、あの理想には届いていないということ
をね。
誇り高く麗しい優雅さで受け入れられ、
自発的に発芽し、そして庭師の手助け無しで
素早く咲き誇ることときたら！　それは
違う枝なんだよ、南の空に似せて作られた
荒涼とした半球で育てられたね。
教育でも、基本原則でも、君が好きなように呼べばいい、
なんとか手に入れた純潔というものは、のぼせ上った血から
策略と苦しい闘いを通じて、努力して手に入れられたのであり、
これを要求し、支払いする天に対しては
良心に従って、忘れないように貸しとして記載されるんだ。
自分でよく考えるんだ。彼女は、王妃様に対して隠しきれるかな、
とある男性が、王妃様ご自身の、苦しい戦いを続ける誠実さの
傍らをすり抜けてしまうことを、ドン・フィリップの奥方にとっ
ては
希望のない炎の中で、身をやつれさせてしまうことになるとして
も？

カルロス　君は公女さんをそんなによく知っているのか？

マルキ　　そんなにはっきりは。
二回会ったことがあるかないかくらいだ。でも
一言だけで、僕には充分わかった。思えたんだ、
彼女は、罪悪の弱点をよくわかっていて避けている、
彼女がとてもよく自分の誠実さを知っているかのように。
それから僕は王妃様も見たよ。――あぁ、カール、
僕がここで気づいたことは、なんとすべて違うことか！
生まれながら静かな栄光に包まれ、
配慮を欠いた軽率さや、礼儀を
学校で無理強いされた打算とは無縁で、
奇抜さや恐怖とは正反対で、
しっかりとした英雄の歩みで、あの方は
礼儀作法に適った細い中庸の道を歩まれる。
あの方は、称賛のことなどまったく考えもしないところで、
我知らず、崇拝の念を抱かせずにはおかない。
僕のカールは、この鏡のなかにも
今でもまだエボリさんの姿を認めるだろうか？――公女さんは
耐え忍ぶよ、だって恋をしているから。恋は
あの人の誠実さの中に、文字通り埋め込まれていたんだ。
君はあの人に報いなかった――あの人は落ちるよ。

カルロス　［いくらか激しく］　　いいや！　それはないよ！
［激しく行ったり来たりした後に。］
それはないって言えるよ。――あぁローデリヒが知ってくれたら、
どんなにか素晴らしく、あの乙女が、カルロスから
人間のすばらしさに対するきわめて神々しい至福の信仰を、
奪い取るためにまとっていたかということをね！

マルキ　僕はそれに値するかな？――違うな、僕が心から大好きな

友よ、
こんなことを望んでいなかった、天の神にかけて違うよ！――
あぁこのエボリは――天使かもしれない、
だから恭しく、君自身がそうするように、僕も
あの人の栄華から身を投げよう、
あの人が――君の秘密を知らなかったかのように。

カルロス　ごらんよ、
君の恐怖心は、なんて見栄っ張りなんだろう！　その恐怖心には
自ら恥じ入る以上に、充分な根拠はあるのかい？
その恐怖心は、復讐の悲しい喜びを
その名誉で買うつもりではないのかな？

マルキ　赤面を
しないで済むように、多くの人がさっさと、
恥辱を苦々しく受け入れているよ。

カルロス　［勢いよく立ち上がり、］
いいや、これは
厳しすぎるし、残酷すぎる。彼女は誇り高いし、高貴だよ。
僕は彼女のことを知っていて、何も怖くないよ。無駄に
君は僕の望みを怖じ気づかせようとする。
母上にお話ししよう。

マルキ　今？　何のために？

カルロス　今となっては、大事にとっておくべきものなどない。――
僕の運命は知る必要があるんだ。どうやってあの方に
お話しするか、それだけを心配してくれよ。

マルキ　そして、この手紙を君は
あの方にお見せするつもりなんだね？　本当にそうしたいのかい？

カルロス　そのことを、
聞かないでくれ、今は方法だよ、
お話する方法だよ！

マルキ　［意味ありげに］
君は僕に言わなかったかい、
お母様を愛していると？
王妃様に、この手紙をお見せするつもりなんだね？
［カルロスは、うつむき、黙っている。］
カール、君の表情に
何かが読み取れるよ。――僕にはまったく新しい――
この瞬間まで全然知らなかったよ。――君は
僕から目を逸らすんだね？　本当だろう？――僕は
正しく読み取っているだろう？　ちょっと見せて――
［カルロスは彼に手紙を渡す。マルキはそれを破る。］

カルロス　何だ、気が狂ったか？
［普通の感覚で］
本当は――告白するけど――
この手紙には多くのことが書かれていたね。

マルキ　そう見えたよ。
だから破ったんだ。
［マルキは、穴を開けんばかりに皇子を見つめてじっとしている。

皇子はマルキを疑いの目で見ている。長い沈黙。］
言ってごらんよ――何が
王様の臥所（ふしど）が汚されたって
君の――君の恋に一体何が関係するっていうんだ？
フィリップ様は君にとって危険だったのか？
夫の義務が汚されたって、どの絆が
君の図々しい望みと結びつきうるというんだい？
君が恋をしている時に、王様が罪を犯したのか？　さて確かに、
僕は君が理解できるようになった。あぁ、僕は
今まで君の恋心がわかっていなかったんだね！

カルロス　何だって、ローデリヒ？　君は何を思っているの？

マルキ　あぁ、僕は感じる、
何から遠ざかるべきかって。そうさ、かつて
かつてはすっかり違っていた。そのころ君はとても豊かで、
とても温かかった、あんなにも豊かだった！　全世界が
君の胸に入る余地があった。すべてが
今や過ぎ去ってしまって、情熱や
卑小な私利私欲が絡みついている。
君の心臓は死に絶えてしまった。涙が出ないよ、
諸州の恐ろしい運命に
もう涙が流されることはない。――あぁ、カール、
君はなんてみすぼらしく、乞食みたいな貧乏になってしまったこ
とか、
君が自分以外の誰も愛さなくなってからというもの！

カルロス　［肘掛椅子に身を投げる。――少し間を置き、ほとんどこ
らえることができなくなって、泣きながら、］
わかったよ、
君はもう、僕に敬意を払ってくれないんだね。

マルキ　そうじゃないよ、カール！
僕はこの興奮を知っているよ。それは
称賛に値する感情が迷ったものなんだ。
王妃様は君のものだった、君から
王様が奪ったんだ――でも今まで、
君は自分の権利をさっぱり信じていなかった。
おそらく。フィリップ様はあの方にふさわしかったのだろう。
君は思い切って、そっとだけど、すっかり判決を下したんだ。
あの手紙が判決を下したんだよ。最も価値ある男は君だったと
ね。
誇りに満ちた喜びで、君はさて、
暴君の運命が、つまり盗人の運命が移送されるのを見た。
君は、侮辱される者であることに、歓声を上げた。
だって不当に苦しめられることは、偉大な魂には喜びだから。
でもここで、君の想像力は道に迷ってしまった。
君の誇りは、充分にやりつくしたと感じたんだ――君の心には
希望が芽生えた。ご覧、僕はよくわかっていただろう。
今回は、君自身が自分のことをわかっていなかったね。

カルロス　［感動して、］
いいや、ローデリヒ、君は全く思い違いをしているよ、

君が僕のことを信じようとしているよりも、
僕はそんなに高貴な考え方はしていなかった、はるかに違うよ。
マルキ　　僕のことは
そんなにも少ししか、分かってもらっていないのかな？　ねぇ、
カール、
もし君が考え違いをしているのなら、僕はその度に
僕が間違いを咎めることのできる数百人の中で
誠実さを忠告しようとするさ。でも、
さぁ、僕たちはもっとよくわかりあえた。今は
王妃様にお話ししなよ、話さなきゃいけないよ――
カルロス　［彼の首に飛びついて、］
あぁ、君の傍にいると、僕は恥ずかしいよ！
マルキ　　君は
僕の言葉を聞いただろう。他のこともみんな僕に任せて。
意表を突く、大胆でいい考えが
僕の想像力に浮かんでくるよ。――君は
それを聞くべきさ、カール、立派な口からね。
僕は王妃様のところに押しかけよう。おそらく
明日にはもう出口が見つかるさ。
じゃあな、カール、忘れるなよ、「より優れた理性が
もたらした評価は、人類の苦悩を
打ち砕く、何千回挫折しようと、
諦めてはならない」――聞いてるかい？
フランドルの人々のことを思い出すんだよ！

カルロス　　すべて、すべて、
君と高い誠実さが僕に命じたことをね！
マルキ　［窓に歩み寄り、］
時間が来た。君の従者たちが来る音がする。
［彼らは抱き合う。］
今はまた、皇太子と家来だな。
カルロス　　君はすぐに
町に行くんだろう？
マルキ　　すぐにね。
カルロス　　待って！　もう一言！
すぐに忘れてしまっていた！――とても大切な
知らせだよ、「ブラバントに向けた書簡を
王様は開封する」のだそうだ。気を付けてね！
帝国郵便は、秘密の伝達命令を配達中だと
わかったよ。
マルキ　　どうしてそれがわかったの？
カルロス　　ドン・ライモンド・
フォン・タクシスは僕の仲良しなんだ。
マルキ　［少し黙った後に］　　そういうこともあるな！
ということは、郵便はドイツ経由だね。
［彼らは別々の扉から退場する。］

第二幕終わり、第三幕に続く